論文要旨

音／エロス ―音と体と心が共鳴し合うユートピア的時間―

東京藝術大学
美術研究科　先端芸術表現研究領域
谷原佐智

本研究の目的は、肌で聴く音の触覚性、聴者と音源間の空間性に焦点を当てることで、官能的な音の共鳴メカニズムの解明を試み、「音にエロスは存在する」ことを論証することである。身体性のある親密な触覚的空間音響、官能的な音を共鳴させる触覚的演奏表現の追究により、聴覚を超えて心身全体でエロスを感じる共鳴時空間として開かれた音楽の可能性を提示する。また、身体論の哲学、美学、舞踊学、科学など領域横断的に関われる音楽論を目指す。

視覚芸術や文学においてエロスは主要テーマとなり数多く創作されてきた。しかし、音のエロスに関しては、ワーグナーやスクリャービンなどの作曲家が音の官能性を追求したにもかかわらず、視覚芸術ほどには発展していない現状である。要因として、演奏者・指揮者など他者の身体と楽器を通して作曲家の音を伝えるために直接的な身体性が音楽から遠くなったことや、ワーグナーの『タンホイザー』には３Ｄの官能的音響の萌芽が見出せるが、大部分の官能的な音楽は空間性と触覚性が殆どないために全身でエロスを体感できないこと、また音のエロスがどう展開してきたか音楽史として体系的に充分研究されておらず、演奏者がその音を十分に解釈し表現していない場合があるために、聴者がエロスを感受できないことが挙げられる。この問題提起を出発点とし、演奏する身体と舞踊する身体を再統合させて触覚的演奏を探究すると音のエロス表現が飛躍的に進展し、「肌で聴くエロスの共鳴時空間」を実現させると音のエロスを全身で体感できるのではないかと考えた。

方法として、はじめに生物史を遡って音のエロスの起源を探り、ヒトを含む多様な生物から架空の生物までの求愛行動と誘惑する声を考察することで、音にはフェロモンのように他者を誘引・誘導する作用があり、求愛の声が音のエロスの原型である可能性を

提示している。次に、楽曲の主題やメロディー・ハーモニー・リズムなどの要素に発現するエロスの様相を分析すると、二者の心身が共鳴し合う性愛の時間が音楽構造のプロトタイプであり、この「官能の音楽のメカニズム」は恋愛の最中に作られた音楽において顕著になるという現象を明らかにした。特に、上方倍音列にある属七の和音の鏡像として下方倍音列に現れる導七の和音は、現代のラブソングや愛の映画音楽まで恋慕の象徴として継承され、音のエロスの鍵であることを詳述する。

音のエロスを全身で感受するには、「官能の音楽のメカニズム」を踏まえて親密な触覚的音空間を再構築する必要がある。よって、演奏という行為を、奏者と楽器の身体がエロティックな関係で共に行う触覚反応による身体奏法として新たに捉え直し、更に、奏でる身体に踊る身体のエロティシズムを導入して「エロス演奏方法論」を立案する。演奏者を介さない場合は、空間音響のテクノロジーで音の動きを擬人化し、誘惑する仮想の奏者の身体に舞踊の動きを与え、聴者にアプローチして愛撫する触覚的な音など、求愛するヒトの動きをした身体性のある音を実現すると聴者にエロスの共鳴が起こると考え、触覚的な空間音響作品『未来の求愛の歌 ―あなたのためだけの触覚的時空間―』を創作した。また、視覚が届かない背後の空間は聴覚と触覚の世界であることに着眼し、聴者の後方空間における音の動きを開拓することで、従来のコンサートにはない音空間のエロス化を試みている。

このように、聴者と「愛人化した音」の２人きりの親密な空間で音のエロスの存在感を全身で感じられるよう作品創作を通して実験を重ね、「音にエロスは存在する」ことを立証する。